

## (各論：財務)

- 1 | イノベーティブな研究を行う上で安定的な財源、研究環境の保持は必須であることから、大学の運営費（人件費・光熱水費等）については一定程度安定的な資金で対応する必要がある。外部資金だけで研究に係るすべての支出を賄うことは困難。
- 1 | 他方で国においても政府全体としての予算の制約が存在する以上、OIST に対して出資可能な額にも自ずと上限があると考えられる。本来的には、国が出資できる金額が明確に示されることが望ましいが、OIST において今後中長期的な規模拡充を検討するのであれば、国からの出資額に上限があることも踏まえ、研究の質を担保しつつ運営できる規模がどこなのか、現実的な検討をする必要があるのではないか。また、日本国内の小・中規模の大学における運営上の工夫等も研究してみるなど、規模拡充のみにこだわらない現実的な方策を検討することも一つの方策ではないか。
- 1 | 今、OIST 以外の日本の、特に地方の大学は、運営費交付金も年々減少し、スタッフも減らさざるを得ず、苦しんでいる。スタッフが減少することにより事務的な仕事が増え、研究に手が回らなくなり、結果として論文数も減少するという状況であり、OIST がそのようにならないようにするにはどのようにすべきか、現実に即して考えて行く必要がある。

## (各論：沖縄の振興及び自立的発展への貢献)

- 1 | 山形県鶴岡市に慶應義塾大学が先端生命科学研究所を作っている。OIST が沖縄において期待されているように、周辺における産業形成が役割として期待されている。
- 1 | 同研究所も県や市の資金的なサポートを得つつ、外部資金も獲得している。また、地元の学校との連携による人材育成や地域企業との連携による地元の人材や産業の活性化に努めながら、自立的な発展を模索している。状況が似ているところ、異なるところもあるが、このようなケースも研究してみても良いのではないか。